
コナンオリジナル短編集

seiai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コナンオリジナル短編集

【Nコード】

N2910Z

【作者名】

seiai

【あらすじ】

思いつくままに書いています。主人公は主にコナンです。友情・ほのぼの系中心。事件も起こります。謎の設定あり。

ありがとうございます(前書き)

初投稿です。コナンの胸中。

ありがとう

江戸川コナンという仮の名前、仮の姿。

心は高校生、だが体は小学1年生。不安定で、矛盾した、悪魔のよ
うな存在。この世に本来居てはならない存在。それが俺。

でもそんな俺に、居場所を与えてくれる、みんな。

俺が今もこうして当たり前のように生きていられるのは、俺がここ
に居てもいいと言ってくれるみんながいるから。俺はそんなみんなに
感謝したい。

蘭。いつも心配ばかりかけているのに、俺のことをいつでも笑顔
で迎えてくれて、優しくしてくれて、そして俺のために涙を流して
くれて、ありがとう。

小五郎のおっちゃん。いつも俺のために叱ってくれて、時には大切
な言葉を投げかけてくれて、俺を一人の探偵として認めてくれて、
ありがとう。

阿笠博士。いつも俺の無茶な頼みを聞いてくれて、理解してくれて、
手助けしてくれて、本当にありがとう。

灰原。俺の側に居てくれて、他のみんなには言えない俺の気持ちを、
言葉をいつも受けとめてくれて、ありがとう。

服部。俺のことを親友と呼んでくれて、ありがとう。

元太、光彦、歩美。いつも俺を信じてくれて、頼ってくれて、助けてくれて、ありがとう。

俺に関わってくれる、みんな。俺はみんなに救われた。

だからみんなには絶対幸せになってほしい。そのために俺は生きたい。みんなを少しでも幸せにできるなら、俺は何も厭わない。

それが俺にできる小さな恩返し。俺はこれからも生きていける。

みんな。こんな俺のことを、愛してくれて、ありがとう。

ありがとう（後書き）

この間「ワンピース」を読んで感動したので。
コナンも同じなんじゃないかなと思って書きました。

事件が俺達を呼ぶ（前書き）

タイトルの通り事件です。が、推理要素は無く流れだけです。小五郎視点で書きました。

事件が俺達を呼ぶ

俺の名前は毛利小五郎、探偵である。

傷害、殺人、窃盗、放火……。俺は日々さまざまな事件に遭遇する。そう、自分でも不思議なくらいに。おかげで俺のよく知るある警部からは「疫病神」などという不名誉なあだ名をつけられている。だが俺から言わせればそれは見当違いもいいところである。なぜかといえは……

……俺はそこで一旦思考を止める。背広の内ポケットから伝わる振動に気がついた。

……いいことを言おうとした時に……。誰からだ。俺はぶつぶつ言いながら携帯電話を取り出し、開くと……。そこには、『着信：コナン』の文字。……アイツか。一抹の不安が過ぎる。と言うのも、アイツは俺以上に毎度事件に遭遇しているのだ。前試しに数えてみたら、1週間に5回も何らかの事件に遭遇し、そして解決している。警部も、本当は俺よりもアイツのほうを「疫病神」と呼ぶべきではないだろうか。……まあそれはいいとして。

とりあえず電話に出てみると……。やはりコナンは事件に遭遇したようだった。たまに事件に巻き込まれてケガを負うことがあるので、心配したのだが、今回はどうやら大丈夫だったようだ。しかし事件は殺人事件で……。すぐに現場に来てほしいとのこと。俺はコナンに現場の状況、被害者の状況を聞いて、細かい内容はメールで送るよう指示し、すぐに現場に向かうと伝えてから、電話を切った。ふう、と一つ息を吐き出してから俺は席を立ち、事務所を出た。

現場に向かう途中、コナンからメールが入る。映し出された文字を目で追いながら、現場状況を頭に入れる。…あとは、実際行ってみてだな。

「コナン」というのは、事情があつて今ウチで預かっている少年である。小学1年生のくせに、「キッドキラー」「小学生探偵」の名で知られている。探偵に必要な観察力・記憶力・判断力・推理力、アイツはそのどれもが際立って優れている。認めたくはないがこの俺よりも…。真実とは、時に恐ろしい。「実体」という揺るぎない証拠を突きつけられれば誰でも、信じざるを得ない。アイツはわずか7歳にして、真正正銘の「探偵」なのである。

考えているうちに、電車が駅に到着し、俺は現場に向かった。現場に着くと、すでに警察が現場周辺を固めていた。その中に

「おじさあん！」

小さな腕を大きく動かしながら俺を呼ぶコナンがいた。その姿はどう見てもただの子供にしか見えないのだが。

「あれから何か見つけたか？」

「うん。でも警部さんは、事件とは関係ないだろうって…」

「だがお前はそうは思わない、だろ？」

「うん」

俺が事件について尋ねると、コナンは一転して真剣な表情に変わる。こういう時のコイツは本当に頼りになる。ふと、周りから俺を嘲笑するような、微かな笑い声が聞こえてきた。…なぜかは分かる。おそらく小学生と真剣に話す俺が可笑しいのだろう。

コナンは今までずっと、周囲の大人と闘ってきた。自分の意見をまともに聞こうともせず、目を向けようともせず、子供の戯言だと笑った大人達と。俺も以前はそのうちの一人…いや、むしろ最たる一人であった。それが今ではコナンを「探偵」と認め、信頼している。コナンも俺のことを以前よりは信用してくれているであろう。笑いたい奴らには笑わせておけばいい。俺達の心は変わらない。真実を見いだすために全力を尽くす…。

その後、俺はコナンの見つけた手がかりを元に、真実につながる推理に至ったのであった。

*

事件の翌日。

俺、蘭、コナンの3人で囲む朝食。俺にとって掛け替えのない家族と共に過ごす至福のひと時。今日は朝から調子がよかった。開けた新聞に昨日の事件の記事が俺の写真とともに大きく載っている。

『毛利名探偵、今度はスピード解決！ わずか15分で犯人を特定』

思わず得意になる俺。蘭達も傍に寄って来てその記事を眺めている。記事には直接的に解決した俺のことが中心に載っていて、コナンのことは一言も触れられていなかったが、コナンも蘭と共に喜んで笑っていた。

「今回もお手柄だったね、お父さん、それにコナン君も！」
「おうそうだ、お前のおかげだな」

そう言つてコナンの頭を撫でると、コナンはえへへ、と小さく照れ笑いを浮かべた。

俺はこんなことを考えた。もしも、コナンが事件に遭遇していなかったら……。事件は解決せず、捜査は長引き、被害者の遺族など関係のある者の苦しみが長引くことになったかもしれない。それに、犯罪は新たな犯罪を呼ぶ。加害者の心はどこまで行つても不安定なのだ。その意味で今回その拡大を防いだことは、探偵の大きな功績である。新聞は重要な真実を掴めていないが、俺達はお前の功績を知っている。今はそれでいい。それにもう一つ、俺の考えていたことはどうやら正しかったようだ。「疫病神」などという言葉が単なる幻想だということを。俺達が事件を呼び込むのではなく、事件が俺達を呼ぶのである。

今日も解決を求めて事件が舞い込む。

事件が俺達を呼ぶ（後書き）

FIELD OF VIEW の「君がいたから」という曲を聴いていたときに、”笑いたい奴らには笑わせておけばいい”という歌詞が耳に残ったので、小説に入れてみました。

目暮警部をかなり悪く書いています。好きな方、ごめんなさい…。いい人だとは思いますが、鈍いと言うか…。警部としては一番登場回数が多いのに、「一番後に気づく人」になりそう…。

服部平次の書簡（前書き）

平次のコナン（新一）にあてた手紙です。

服部平次の書簡

工藤へ

お前ってホンマに大した奴ぢやなあ。薬で小学生にされてもって、工藤新一やった時の幸せを失うても、希望捨てずに生きとんのやから。…ホンマようがんばっとるわ。

でもお前はちつさい体で無理すぎやで。この前も、俺と和葉を庇って骨折しよるし。まあ、あれだけまともに撥ねられて左腕の骨折だけで済んだんやから、お前も運強いよな。

でもあん時はホンマ焦ったで。俺と和葉が打ち上げ花火に見入ってる時に飲酒で居眠り運転の車が突っ込んできて…。最近の車はエンジン音がほとんどせえへんから、花火の音で完全にかき消されて俺と和葉は全く気づかんかった。でもお前だけが車の振動音に気がついて「危ない！」言いながら俺らを突き飛ばして代わりに…。撥ね飛ばされたお前に何を呼びかけても反応せえへんから急いで救急車呼んで…。お前は小さな体やってホンマにちゃんと自覚しとるんか？

病院着いてお前がやっと目え覚ました思ったら、傍で項垂れとる俺らに「よかった」って。工藤、お前少しは自分のことも気にかけるや。痛々しい腕見せよってからに…。和葉なんか声上げて泣いてまっただやないか。

工藤は子供の体やから近づいてくる車の振動音が分かったって笑いながら言つとったけど、本当は苦しいんやろ？ 悔しいんやろ？ その体であることに。黙つとつても俺にはちゃんと分かってんで。

そのあと飲酒と居眠り運転の兄ちゃんが来てなんや謝罪しとったけど、工藤は毛利のおっちゃんを通してそいつを許しとったよな。もうこないなことを起こさんように、改心せえよって。

『犯人を推理で追い詰めて自殺させちまう探偵は殺人者と変わらねーよ』

工藤は前にそう言っとな。それやから、その言葉があるからお前は犯人を責めへん。責めるんは罪それ自体と、犯罪に手を染めてしまった犯人の弱い心や。やから犯人を許すし、犯人が自殺することを望まん。犯人は捕まえるけど、その後はしっかり罪を償って更生してほしいと思っとる。そうやる工藤？ お前はホンマ達観しとんなあ。

けどそれやったらお前の体を小さくした黒ずくめの連中はどうや？
いくら工藤でも、奴らだけはどあつても許せん気持ちのが強いはずやる？ …けど俺はなんとなく、工藤は結局それでも許すんちやうかって思うとる。お前は、ホンマに優しい奴やからな。

工藤。お前は俺の最高の親友や。やから今は体がちっさい工藤を、俺はどんなことがあつても守る。お前は嫌がるかもしれへん。けど、俺は勝手にさせてもらうで。何かあつたら、俺は俺の都合を全部蹴つてでも大阪から飛んでくるからな…。

「あの時車に気づけたのは俺しか居なかつただろうから、二人を守る使命が俺にはあつた。それを果たせてよかった…」

あの時のお前の言葉、俺は忘れへん。今度は俺が使命を果たす番やからな！ 覚えとれよ。

服部平次の書簡（後書き）

二人の関係がすごく好きです。

最後のコナンの台詞は、私が昔教わった言葉で、お気に入りの言葉です。小説に載せることができている嬉しいです。

暗号メール(前書き)

コナンに暗号メールが届きます。学校にて。

暗号メール

『 8 6 2 - 3 7 1 5 』

携帯電話に映し出された妙な数式にコナンは疑問符を浮かべたが、差出人が小五郎ということと、朝その小五郎に言われた言葉を思い出し、そういうことかと納得する。

「コナン、今日学校が終わったら俺と会議をしよう。お前に相談したいことがあるんだ。落ち合う場所は昼にメールを入れる。…あ、それとこのことは蘭には内緒だからな」

小五郎は蘭に背中を向けながらコナンの耳元でささやいた。

…ということは、これはその場所の情報を示した暗号で、これを帰りまでに解いて目的の場所まで行け、ということか。

コナンは徐々に期待感で胸が高まっていくのを感じた。探偵の性というものであるうか。…しかしいざ解き始めると、コナンには少々簡単すぎたようで…。ちよっぴり寂しさを覚えるコナンであった。

「何だコナン、メールか？」

携帯電話を閉じようとしたとき同じクラスの少年元太がコナンの背中ごしに声をかける。体に見合ったデカイ声。それに今はえらく上機嫌である。その理由は今が給食の後だからであることは、まず間違いない。

「誰からだ？」

「小五郎のおっちゃん」

答えてコナンはなんとなく、この後の展開が予想できた。食後の元太が暗号を目の前にしたとき、その後起こりそうなことは…。

どんなメールだ？ とコナンの携帯を覗き込んだ元太はその内容に首を傾げる。

「なんだこの数字…？」

「…暗号だよ」

暗号、という単語を聞くと元太の表情はさらに明るくなり、確かめるようにその単語を復唱する。それもかなりのデカイ声で。近くにいた3人の少年探偵団員も、当然その言葉に反応する。…分かりやすい、いつもの展開となった。

『 8 6 2 - 3 7 " 5 』

「何でしょうねえ、この暗号…？」

「引き算の式じゃないの？」

「でも答え間違ってるぞ…？」

メールの暗号をノートに写し、コナンの机を囲みながら思案する3人の少年少女たち。元太、光彦、歩美。ここにコナンと灰原哀を合わせた5人が、都内では少し名の知れた少年探偵団である。

「そもそもなぜ毛利探偵がコナン君にこんな暗号を送ってきたんですか？」

「学校が終わったらこれの示す場所に来てことだろうな」

「となると…」

光彦は再び考え込む。それを見たコナンと灰原が横から促す。

「…つまり、これだけでその場所の情報を示すんだから、これが数式ってのは考えにくいよな」

「それならこの暗号はその場所の住所か郵便番号、もしくは…」

そこで3人ははっと気づく。

「」「電話番号!」「」

声を合わせる3人をコナンと灰原は横で見守る。

「でも、電話番号に“引く(・)”はあるけど、“わ(=)”は無
いよ?」

「うーん、それに電話番号なら普通10桁か11桁ですし、最初の
8と6の間の空白も気になりますね…」

「8の左と5の右も空いてるぞ」

また考え込む3人。昼休みの時間も、徐々に終わりが近づいてきた。
そこで灰原は大きなヒントを出す。

「それならその空白や記号も数字で表してみたらどうかしら?」

3人は「あ!」と同時に声を出す。

「なるほど! じゃあ最初の8の両側と最後の空白は“0”ですね
!」

光彦がノートの暗号の下に新しく暗号の答えを書き始める。

0 8 0 6 2 - 3 7 " 5 0

「わかった！ この“-”は数字の1のことね！」

「ならこの“”は2だな！」

0 8 0 6 2 1 3 7 2 5 0

「…ちゃんと11桁になってるし、これで間違いなさそうだな」

コナンがそう言って笑いかけると、他の4人も笑みをこぼした。

コナンには4人と共に暗号を解いたこの時間が、とても貴く感じられた。

*

「…なんでオメーらまで付いてくるんだよ？」

帰り道…コナンは自分の後ろをついて離れない4人に怪訝そうに尋ねる。4人中3人は嬉々として付いてきているようであり、灰原はその光景を見ながら含み笑いを浮かべていた。

「え、だってコナン君一人だと怖い人に狙われるかもしれないで

「しよ？」

「え？」

「ほら、コナン君よく新聞に載る有名人だし！」

「この前は雑誌にも取り上げられていましたしね」

…確かにコナンが事件解決などで新聞に載った日からしばらくは誰かの視線を感じるが多かったし、雑誌に載ったときは一度本当に襲われて危険な目にあっただけでもコナンにはあった。あの時は犯人を逃がしてしまっただけで、もしかするとその時にコイツらが一緒にいてくれたら捕まることのできたのかもしれない、とコナンは思った。それほどまでに少年探偵団の一人ひとりが成長してきている。もう自分の身は自分で守れるほどにまで。

「ありがとな…オメーら」

「それにお前に付いていっただら毛利のおっちゃんに奢ってもらえるしな！」

「あ、元太君！ それ言っちゃだめですって！」

「…相変わらずね、小嶋君は」

どんなときも食べ物のは決して忘れない元太。それが可笑しくて4人は思わず吹き出した。元太は不服だったのか少しの間ふくれていたが。5人は小五郎の待つ場所へ向かった。

*

「こんな出費予定外だぞ…」

「ホントにごめんね、おじさん…」

呆れながらばやく小五郎に、コナンは手を合わせて謝る。店を出て、4人と別れてから今は2人の帰路。予想していなかった6人分もの食事代を支払わされ、軽く頭をかかえる小五郎。特にとにかく量を要求するあの大食漢には参らされた。

「僕も駄目元だったんだけど、おじさんが『しょうがねえな』って言うてくれたからお金に余裕があるのかと思って…。でもどうしてあの時、おじさんはみんなを追い払わなかったの？」

コナンの不意の質問にぎくりとした小五郎だったが、少しの間を置いて気恥ずかしそうに答える。

「…できるわけねえだろ？」

「え？」

「お前らがあんなに仲良さそうにしてんのに、引き離すなんてことはよ…」

「…!」

目を丸くして見つめてくるコナンを見ながら、小五郎はやはり恥ずかしいと感じたが…。自分の顔に合わせるコナンの視線を遮るように、コナンの頭にぽんと手を乗せ、微笑みかけた。

「良い仲間に恵まれたな。大切にしろよ」

そんな小五郎の優しい言葉と温かい手に包まれながら、コナンは今

の幸せを噛みしめた。

暗号メール（後書き）

オリジナル設定まとめ

小五郎はコナンを探偵と認めている。

少年探偵団は自分の身を自分で守れるほど成長している。

コナンは雑誌に載ったことがある。

おいしいご飯を（前書き）

蘭視点です。

おいしいご飯を

冬も近づくと11月のある日の夕方。私はいつものように買い物に出かけていた。ふと衣料品店の前にカジユアルな子供用のコートが飾ってあるのに気づき、足を止める。もうすぐ冬だし、コナン君に新しいコート買ってあげたいな…。

コナン君がウチに居るときはよく買い物に付き合ってくれるんだけど、今日はお父さんと一緒に事件に行っちゃった…。

普通では信じられないことかもしれないけれど、コナン君は小学生探偵でよくお父さんの仕事を手伝っている。コナン君がウチに来た当初はそんな凄い子だとは思ってもみなかったから、お父さんも私もコナン君を事件にはできるだけ関わらせたくないと思っていた。でもお父さんの仕事が上手くいくようになるにつれて、だんだんコナン君の存在が大きいことに気づいていった。実際コナン君が居ないときのお父さんは仕事に行き詰まって苛々することが多かった。今思うと私はその度にコナン君がいてくれたらと心のどこかで呟いていたような気がする。

そのお父さんも今ではコナン君を探偵と認めて、事件があればコナン君と一緒に連れて行くようになった。

でも私はその度に心配で堪らなくなる。だってコナン君がどんなに頭がよくて推理ができて、あの子はまだ小学1年生なんだから…。

もしもこの世に神様が居るなら教えてほしい。なんでコナン君にこんなチカラを与えたの？ コナン君の名が世間に知られれば知られるほど、嬉しさよりも不安な思いが先行する。だって、悪い人が悪

いことに利用しようとするとも限らないから…。コナン君には危険のない普通の暮らしをしてほしいのに、なんであの子からそれを奪うの…？

「…あ！」

考えながら、お店の中まで入っていた私の目の前に、一つの小さなコートが現れた。コナン君に似合いそう…！ 暖かそうだし、それにとっても軽い。デザインもすごくカッコよくて、でも子供用だから可愛さも兼ね備えてて。コナン君はどんな服を着せても似合うけど、これは特にコナン君のイメージにぴったりだ。私はとても嬉しくなった。

コナン君は将来どんな大人になるんだろう？ 新一と同じでやっぱり探偵になるのかな。探偵になったら、間違いなく名探偵だろうな。コナン君が憧れてるあのシャーロック・ホームズにも負けたくないくらいの名探偵。多くの人を救って、世の中を平和に変えていく。そんなコナン君の姿が思い浮かんだ。

私がどんなに不満を抱いても、多くの人がコナン君を必要とすることは変わらない。あの子はみんなを明るく照らす光だから。ならば私は不満を言い続けるのではなく、私があの子にできることを精一杯やろう。

まずはコナン君がいつも元気でいられるように、風邪を引きやすいあの子を守るために、そして探偵の仕事がより上手く進むように、この暖かくて軽いコートを買おう。

「わあ…やっぱり高い…」

値札を見て思わずたじろぐ私。でもあの子のためにどうしても買ってあげたいな。

「お父さん…許してくれるよね」

私はそこでコナン君用のコートと、一緒に見つけたお父さん用の新しいコートを買った。

次にできることは…。うん、二人のためにおいしいご飯を作ろう。帰ってきた二人の疲れが少しでも癒えるように。いつも健康でいられるように。探偵さんは体調管理が大事だもんね。

『大丈夫。絶対に帰ってくるから！』

ウチを出るときコナン君が心配する私に言ってくれた言葉…。私は信じて待ってるからね。

おいしいご飯を（後書き）

前話の『暗号メール』と比べると、台詞が少なくモノローグ中心なので私はこちらのほうが書きやすいなと感じました。蘭ちゃんは強くて優しく、本当に好きなキャラです。今回はそのイメージを表現してみました。

次回は哀ちゃんについて書きたいと思っています。今後ともどうぞよろしく願います。

U n c o n d i t i o n a l . . . (前書き)

哀視点。阿笠博士宅にて。

シリアスな部分がありますのでご注意ください。

Unconditional...

私の名前は灰原哀。本名は宮野志保。私は工藤君と同じく黒の組織の開発した毒薬、アポトキシン（APT-X）4869を飲んで幼児化した。私は組織の元一員。組織を抜けた私は今も組織の仲間から命を狙われている。

APT-X4869は組織が私に作らせていたもの。元々、体内から毒物反応を出さない薬として開発したのだけれど、ごく稀に体が幼児化するという作用があることがわかった。それが工藤君や私のようなケース。組織の他の人間は例外を除き、この事実を知らない。

私のお姉ちゃん、宮野明美は組織によって殺された。私は真相を突き止めようとしたけれど、組織は口を割らない。私が薬を作るのをやめると言えば、組織に監禁された。生きるのがつらくなった私はAPT-X4869を飲んで死のうとしたけれど、私の体は幼児化しただけで生きながらえた。

でも、なぜ私は今も生きているのだろうか…。一日として葛藤しない日はない。組織に監禁されたとき、私の中には絶望しかなかった。唯一の家族のお姉ちゃんが殺され、組織に裏切られ、私は生きる意味を失った。

組織を抜けた今、私の周りの人々も変わった。阿笠博士や少年探偵団の子供たち、そして工藤君。私には勿体無いくらい、いい人たちばかり。そんな人たちの温かさに囲まれる中で、気が紛れ絶望することも少なくなった。けれど、それでも私の心に空いた穴は埋まらない。私の前には、希望がないのだから…。

組織で薬を研究している頃の私には、希望があった。お姉ちゃんもいたし、私の研究を手助けしてくれた組織を信じていたから…。ジンやピスコも私を可愛がってくれ、ある時は両親の居ない私を慰めてくれた。研究が終わったら、お姉ちゃんと一緒に暮らせるようにすると約束してくれた。私はそんな組織のためになればと、薬の研究を進めていった。

……それなのに彼らは、お姉ちゃんや私を利用するだけ利用しておいて、いざ組織に不利益になるとわかれば簡単に切り捨てた。彼らが私に優しくしていたのは決して私のためではなく、自分たちの利益のためだった。偽善だったのだ。

私はあの時から他人を信じることができなくなった。信じれば裏切られる…。その度絶望に駆られるのなら、初めから他人を信じない。あの時私の心にできた影が、いつも私に冷たく囁きかけてくる。「そうだ。お前は、それでいい」と…。

そう、所詮他人とはそんなもの。友情も恋愛も、人間関係なんて些細なことですぐに壊れる。早い話が“条件つき”なのだ。例えばよくある金銭トラブルによる関係破綻は、結局のところ自分が相手よりもお金のほうを取った結果。性格の不一致による破綻は、自分の思い通りに動かない相手を嫌いになった結果。

……結局は皆、自分しか見ていない。お金とか性格とか、相手に要求するだけ要求しておいて、いざ条件が変わって自分に合わない判断すれば関係を断ち切る。そんな人を誰が信じると言っのかしら？

私の拠り所は家族だけだった。お母さんもお姉ちゃんも、いつも私

を愛してくれた。時には自分の犠牲も厭わず、私を守ってくれた。

それは私がお金を持っていたからでもなく、科学者になり得る頭脳をもっていたからでもない。二人はただ娘や妹という変わらない私の“存在”を愛してくれていた。私は最高に幸せだった。そしていつか私も家族に恩返ししたいと思った。……それももう叶わなくなってしまうけれど。

「……おい、灰原！」

ふいに玄関からあの探偵さんの声がした。考えに耽っていた私は彼との約束を思い出す。

そういえば昨日、私が彼にA P T X 4 8 6 9の解毒剤（もちろん試作品だけ）を新たに作ったことを電話で話したら、彼は興奮しながら今日のこの時間に私のところに来ると言っていたわね。……そんなにも元の体に戻りたいのね、工藤君…。

「ちゃんと来たぜ、灰原！」

「そうね、あなたにしては珍しくね」

「なんだよそれ…」

いい顔で興奮している彼を言葉でクールダウンさせる。……ふ、面白いわね。でも、分かっている。彼が普段から私に優しい言葉を掛けてくれるのも、守ってくれると約束してくれたのも、私が解毒薬を作っているから……。 “条件つき”なのよね。あなたも結局は他の人と同じように……。

「……どうした、灰原？　なんか元気ねえな」

工藤君は暗い表情をしていた私を心配して声を掛けてくれた。でも工藤君、それは欺瞞よ……。

……ふと私の中に意地悪な考えが浮かんだ。少し、彼のことを試してみようかしら……。

私は顔をさらに曇らせ、力なくみせながら、口を開いた。

「……ねえ工藤君、今から私が言うことを落ち着いて聞いてくれる？」

「え？　あ、おう……」

工藤君も少し不安そうな表情になる。……さて、私の言葉にどんな反応をするかしら。私の中の影が黒い笑みを浮かべる。

「昨日、突然ベルモットから連絡があつて、私が開発したAPT-X

4869のデータが……すべて無くなっていたそうなの」

「え……？」

「たぶん組織が薬もろとも廃棄してしまったんでしょ……。薬のデータが無いなら、完全な解毒剤は作れない……。確実にね」

「な……。灰原、それは……。本当、なのか……？」

「残念だけど本当よ……。一応電話記録を取ったから、後で確かめてみるといいわ」

「……………」

しばらくは動揺を隠せない様子の彼だったけれど、徐々に悲痛な表情になって俯いた。

……そうよね、無理もない。あれだけ元の体に戻りたいと今まで頑張ってきたのに、それが叶わないと聞かされたのだから。

そして悲しみの次には……きっと憎しみがくるでしょうね。冷酷な私に向けて。理由はあるにしても、私の作った薬で体を小さくされたのは事実。しかも今度は私の口から絶望の言葉を聞かされるんだもの。当然よね。こんなことを言っておいて、謝罪の言葉一つ無い私なのだから……。

それにこの作り話の通りなら、あなたにとって私の存在価値はなくなっただけ……。解毒薬を作るという条件を、私はあなたに提示できなくなる。もういつ関係を切ってもあなたに損はない。むしろこれから私と一緒に居ても私はあなたの邪魔になるだけ。……さあ、早く怨みの言葉を吐きなさい。中途半端な優しさをみせてくれるより、私もそのほうが楽。もうこの世に、未練もなくなるから……。

私が彼の言葉を待っていると、彼は震える声を抑えるように言った。

「……ごめんな、灰原っ……」

「え……？」

思いもよらない言葉に、私は固まり言葉を失った。なぜ……謝っているの……？

「元の体に戻してやれなくて……ごめん……」

『母親らしいこと、何もできなくてごめんね、志保ちゃん』

彼の言葉が、遠い日のお母さんの言葉と重なった。

「俺が早く組織を探し出すことができたら、こんなことにはならなかったのに……」

「うっっっ……」

彼の思いを理解した瞬間、私は彼の服をつかみ、彼に体を預けて泣いた。とめどなく溢れてくる涙を私は止めることができなかった。

……謝らないといけけないのは私のほうだ。彼を、こんなにも優しい彼を試すなんて……。ごめんなさい……。ごめんなさい……。工藤君。私は間違っていた。あなたはいつも私のために、無条件に私を包んで優しい言葉を掛けてくれていた、守ってくれていた。まるで、お母さんやお姉ちゃんのように……。

私はまた人を信じることができなの？

この人を信じてもいいの？

私はまた、希望をもってもいいの？

いつの間にか私の中の絶望に陥りたくないという心が、私を弱くしていた。でも、それではいけない。まだ、生きることを諦めてはいけない。未来を諦めてはいけない。私にはまだ、あなたがいるから。

私は決意した。あなたのために絶対に解毒剤を完成させて、あなたを元の体に戻す。こんなにも大きな希望と生きる勇気をくれて、何も返さないでいられるような、冷酷な私じゃない。お母さんやお姉ちゃんにできなかった恩返しを、あなたにさせてほしい……。

……不思議ね。そう考えると力が湧いてくる。今までの私が嘘のよう。信頼できる人がいることや希望をもてることが、こんなにも貴いことだったなんて……。私の心に明るい光が射しこんだ。

Unconditional... (後書き)

更新遅れてすみません><

タイトルの『Unconditional』、当然ですがこれがこのお話のキーワードになっています。よかったら調べてみてください。

書いてみてあれなんです、シリアス系を書くのって難しいですね…。いろんな書き方に挑戦したいと思っているのですが、これは私には不向きかなと感じてしまいました。

哀ちゃんはもちろんこの後、自分の話が嘘だったとコナン君に言うと思うんですが、泣いた後だし、たぶん翌朝ぐらいになるだろうな〜と想像しています。

哀ちゃんに希望の光が射しましたので、これからはほのぼの系中心で書こうと思っています。オリジナル設定のエピソードなども随時載せていきます。

今年もあと少しですね。皆さんよいお年を！

最後まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2910z/>

コナンオリジナル短編集

2011年12月29日16時51分発行